

連動文の範疇とレベル別教授法*

俞 稔 生**

A Method of teaching Prural-conjugated sentences
according to Categories and Levels

Rensheng Yu

キーワード:

文法、連動文、兼語文、教授法

概 要:

連動文の定義は人それぞれであるため、高校や大学における第二外国語としての初級中国語では、教科書の採用を変更するごとにその解釈も変化している。範疇が不確定ゆえに、学習者にとっても、教授する側にとっても混乱の起きやすい文型である。

小論では、まず連動文の定義(条件と制限)を打ち出し、連動文ではないやや複雑な文型を示したあと、従来と異なる視点で分類し、解説を加えた上で、初級(大学1、2年)と中級(大学3、4年)のレベル別に、他の文法と関連させた機能的、効果的な教授法をチャート化して提起する。

はじめに

連動文とはその名のとおり動詞を連ねる文のことである。ある短文を、学校文法で、この文は兼語文であり、使役文でもあり、連動文でもあると教授したら、学習者は必ずや困惑してしまうであろう。連動文は簡単な用法から、複雑な用法まで多岐にわたる。また、前の動詞(句)は比較的簡単であるが、後の動詞(句)は構造が複雑で、弾力的である。

1. 連動文の定義

「文の述語に2個以上の動詞及び動詞フレーズ(句)が連用されている文」というのが一番シンプルな定義となるが、これでは拡大解釈がなされ、混乱が生じてくるので、通常以下のようないくつかの制限が加わる。

制限1: 連用されている動詞及び動詞(句)の行為は時間の流れに沿って連続して行われ、両者には互いに一定の意味的關係が存在しなければならない。

制限2: 連用されている動詞及び動詞(句)の間に

はポーズを置ける余地のないものに限る。

制限3: 前半の動詞(句)に接続詞を用いず、後半の動詞(句)に副詞を用いることはできない。

制限4: 連用されている動詞及び動詞(句)の主語は同一のものとする。

制限5: 動作行為を表さない“有”が前半の動詞(句)にあるものを除外する。

制限1~2は連動文の典型的な特徴と言えるもので、おおかた異論は出ないものと思われる。制限というよりも、むしろ条件と言ったほうが妥当である。制限3の判断はまちまちである。特に制限4は、主語が動詞(句)の同一の動作主ではない「兼語文」を含めるか否かに関わる分岐点となる。制限5の“有”が前半の動詞(句)にあるものにも、「兼語文」の例がある。

連動文の定義に制限を付ければ付けるほど、その範囲は狭まっていくが、定義にどの制限を付けるかどうかは個々の教師の判断にゆだねられており、統一されていないのが現状である。

2. 連動文ではない文型

「文の述語に2個以上の動詞及び動詞フレーズ(句)が連用されている文」であっても、制限1~2の条件を満たしていないもの、つまり連動文とは呼べない文には下記のようなものがある。

(1) 我们唱歌跳舞,真愉快!

(私たちは歌ったり踊ったりして、とても楽しい。)

(2) 我看电视吃饭。

(私はテレビを見ながらご飯を食べる。)

(3) 我爸爸每天早上起床看报纸。

(私のお父さんは毎朝起きて新聞を読む。)

(4) 我喜欢打乒乓球。

(私は卓球をするのが好きだ。)

(5) 我想她明天来。

(私は彼女が明日来ると思っている。)

* Received December 18, 2006

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 国際交流学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

(6) 他教我们汉语。

(彼は私達に中国語を教える。)

(7) 她告诉我明天去。

(彼女は私に明日行くと告げた。)

(1) の“唱歌跳舞”は「並列関係」にあり、“和”や“而”などを加えることができる。“唱歌、跳舞”とポーズを置く余地がある。

(2) “看电视”と“吃饭”は独立した異なる行為であり、両者には互いに一定の意味的關係が存在しない。また、ポーズを置く余地がある。正確に中国語の文法に沿って翻訳すれば「テレビを見たり、ご飯を食べたり」となる。

(3) では時間の流れに沿って動詞を並べてはいるが、これも(2)と同様である。平井(注1)は、2個の動詞(句)の独立した異なる行為であり、“起床”という手段で“看报纸”という目的を達成するとは考えられない、と指摘している。“看报纸”の代わりに“刷牙”を入れれば明白である。「毎朝起きて新聞を読む」を中国語に翻訳すれば、每天早上起床以后看报纸。または、每天很早起床看报纸。としなければならない。

(4) は主語+動詞+目的語(動詞+目的語)構造であり、2個の動詞は時間の流れに沿って並べられていない。また、“喜欢”の後にポーズを置くことができる。

(5) は主語+動詞+目的語(主語+述語)構造である。これも、“想”の後にポーズを置くことができる。

(6)、(7) はいずれも二重目的語構文である。

3. 連動文の形式

手元にある研究図書のうち、連動文を意味的關係により最も多く分類してあるものが李臨定著の『中国語文法概論』である。全部で11形式に分類されているが、大きく3類に帰納できる。このほかにも連動文の特徴を呈しているものがあり、分類の仕方も多様である。小論ではよく見られる形式を以下のように分類し解説を加えることとする。

3-1. “来”や“去”を伴う連動文

形式1：前の動詞(句)は手段・方式を、後の動詞(句)が移動先を表している。

(1) 我坐飞机去上海。

(私は飛行機に乗って上海に行く。)

(2) 你坐公共汽车来。

(あなたはバスに乗って来なさい。)

連動文では、前の動詞(句)は必ず目的語(または動作量)を伴うが、(2)のように後の動詞(句)は目的語はなくても成立する。

(3) 我骑自行车上学。(私は自転車で通学する。)

(4) 我坐地铁上班。(私は地下鉄で出勤する。)

形式2：前の動詞(句)は移動先を、後の動詞(句)が目的を表している。

(1) 我去银行取钱。

(私は銀行に行ってお金をおろす。)

(2) 你来我家玩儿吧。(私の家に遊びに来なさい。)

(3) 我上街买东西。(私は街へ買い物に行く。)

形式1と形式2とでは“来”や“去”、“上”の位置が逆転する。

(4) 我去买东西。(私は買い物に行く。)

(5) 你来玩儿吧。(遊びに来なさい。)

連動文では、連用する2個の動詞が隣り合うことはなく、目的語を伴うが、(4)、(5)のように“来”や“去”だけは裸のままでも隣接させることができる。また、日本語では目的を先に述べることもある。

形式3：前の動詞(句)は目的を、後の動詞(句)が移動を表している。

(1) 咱们也看热闹去。

(私たちも野次馬見物に行こう。)

(2) 我们看你来了。

(私たちはあなたに会いに来た。)

2個の動詞(句)の行為は時間の流れに沿っていない例外的な形式で、「～しに行く／来る」という意味を表す。この場合、小野(注2)は、“来”や“去”は轻声で発音され、後に更に場所を示す目的語を付けることはできない、と述べている。

(3) 我骑马去。“去”は轻声

→ (私は馬に乗りに行く。)

もし“去”を第4声で読めば形式1となる。

→ (私は馬に乗って行く。)

形式4：前の動詞“来”や“去”に「行く、来る」の意味はなく、後の動詞(句)の行為を積極的に行うことを表している。

(1) 我来介绍一下。

(私からちょっと紹介しましょう。)

(2) 那件事，我自己去想办法。

(その件は、私自身でどうするか考える。)

(3) 我来讲几句。(一言お話をいたします。)

(4) 你来扫地，我去擦窗户。

(君は床を掃いて、僕は窓をふくから。)

形式5：“来”や“去”に「行く、来る」の意味はなく、前後の動詞（句）を結ぶ役割をはたしているもの。意味的關係では前の動詞（句）は手段・方式を、後の動詞（句）が目的を表している。

- (1) 打个电话来了解情况。
(電話をかけて状況を理解する。)
- (2) 下定决心去争取胜利。
(決心を固めて勝利を獲得する。)
- (3) 开宴会来欢迎他们。
(宴会を催して彼らを歓迎する。)
- (4) 提了一桶水去浇花。
(おけに水をくんで花にやる。)

3-2. 介詞（前置詞）を用いる連動文

次に、本来の動詞としての機能が弱化した介詞を用いて連動文を構成する例を挙げる。

形式1：前の動詞（句）は手段・道具・材料などを、後の動詞（句）が行為を表している。

- (1) 请用圆珠笔写。
(ボールペンで書いてください。)
 - (2) 我们也拿筷子吃饭。
(私たちも箸でご飯をたべます。)
 - (3) 我打电话告诉他。(私が電話で彼に伝える。)
- “用”や“拿”は本来動詞であるが介詞（前置詞）と見なすこともできる。
- (3)の“打”は動詞だが、介詞的に和訳した。

形式2：前の動詞（句）は場所を、後の動詞（句）が行為を表している。

- (1) 我常坐在海岸上钓鱼。
(僕はよく海岸で釣りをする。)
- (2) 她站在门口用手机。
(彼女は入り口で携帯を使っている。)
- (3) 我们在饭馆吃。
(私たちはレストランで食事する。)

(1)、(2)のように「動詞」+“在”で連動文を構成する。(2)は付帯状況を表しているとも考えることもできる。“在”の前の「動詞」を取れば(3)と同じ介詞フレーズ（前置詞句）となる。介詞を使った連動文は連用修飾語の役割をはたしている。

3-3. “着”を用いる連動文

「動作の進行」や「状態の持続」を表す連動文では“着”を用いる。

形式：前の動詞（句）に“着”を用い、後の動詞（句）の動作が行われる付帯状況を表している。

- (1) 她流着眼泪说～
(彼女は涙を流しながら話す。)
 - (2) 我们喝着咖啡聊天儿吧。
(コーヒーを飲みながら話をしましょう。)
 - (3) 他躺着看小说。
(彼は横になって小説を読んでいる。)
 - (4) 咱们走着去吧。
(私たちは歩いて行きましょう。)
- 前の動詞には目的語はあってもなくてもよい。後の動詞（句）が主要な動作である。

3-4. その他の連動文

形式1：後の動詞（句）の動作が行われる時点で、すでに前の動作が完了していることを表している。

- (1) 到了中国给我来封信。
(中国に着いたら手紙をください。)
- (2) 他们吃过晚饭散步去了。
(彼らは夕食をすませて散歩に行った。)
- (3) 孩子们听完故事哈哈大笑起来。
(子どもたちは物語を聞き終わると、ワッハッハッと大笑いしだした。)
- (4) 她抱起孩子吻了一下。
(彼女は子どもを抱きあげ口づけした。)

二つの動作行為は相前後して発生する。前の動詞（句）には“了”や結果補語などが付くことが多い。前の動詞（句）の後に“以后”を加えた意味と同じになる。

形式2：前の動詞（句）の目的語を対象として、後の動詞（句）が何らかの行為を行う。

- (1) 我们包饺子吃。
(私たちはギョーザを作って食べる。)
 - (2) 倒一杯茶喝。(お茶を一杯ついで飲む。)
 - (3) 我准备自己做巧克力送给他。
(私は自分でチョコレートを作って彼にプレゼントするつもりです。)
 - (4) 寄钱给她。(彼女にお金を郵送する。)
- “茶喝”、“茶”、“巧克力”、“钱”がそれぞれ受け手になっている。

(4)は俞の先行研究(注3)では、「给她寄钱」が“给”の介詞（前置詞）用法としての基本文型であり、「寄钱给她」とも言えるのは二重目的語を取れる“给”の特殊性に起因するとしているが、連動文と見ればこの問題は解決する。

形式3：前後の動詞（句）が**肯定・否定の両面から同じ動作**の説明をする。

(1) 为什么呆不下去, 她闭口不谈。

(なぜ留まることができないのか、彼女は口を閉ざして語らない。)

(2) 她板起脸不哭。

(彼女は顔をこわばらせて泣かなかった。)

この用法は“着”を用いる連動文にも多く見られる。

(3) 大家都坐着不动。(皆座って動かなかった。)

(4) 他握着我的手不放。

(彼は私の手を握ってはなさない。)

なお上記以外の、3個以上の連動文や、連動文の中に兼語文が含まれる文、兼語文の中に連動文が含まれる文、及び述語が形容詞からなる連動文などは省略する。

4. 第1章の制限3について

「前半の動詞（句）に接続詞を用いず、後半の動詞（句）に副詞を用いることはできない。」とは、他の何らかの要素を借りて成立したとしても、連動文とはみなさないという判断である。

この制限について、李臨定はおおらかに対応している。例を挙げると、

(1) 他上夜班回来晚。

(彼は夜勤で帰るのが遅くなる。)

(2) 你去上海一定会见到他。

(君は上海へ行くと必ず彼に会うことでしょう。)

(1)は“因为～, 所以～”、(2)は“如果～, 就～”のわくの中に入れることができるが、連動文としている。これに対して、平井和之は制限に厳格であり、接続詞や副詞“就”があるものは除外している。しかし、平井自身が連動文として例に挙げた下記(3)には副詞“再”が入っているので混乱してしまう。

(3) 他们商量一下再告诉他。

(我々はちょっと相談してから彼に伝える。)

(4) 吃了饭再走吧。

(食事がすんでから出かけよう。)

(3)、(4)を連動文とみなすか、(1)～(4)まで連動文とみなすかは個々の判断にまかすほかない。

5. 兼語文について

文の述語に2個以上の動詞（句）が連用されている文には、同一主語の一貫した動作を表す「連動文」と、述語の担い手が異なる「兼語文」がある。例えば、

(1) 我请医生看病。

(私は先生に病気を診察してもらう。)

例文では、“医生”は“请”の目的語であり、かつ“看病”の主語でもある。“医生”は目的語と主語を兼ねているので「兼語文」というのである。また、兼語文の大部分は「使役文」である。竹島(注4)によれば、中国では1984年から学校文法では兼語文を使役文に限定している、ということであるが、日本では兼語文は独立した文法事項として取り扱われている。近年、日本では兼語文は連動文の一種とする(連動文に含める)傾向が強い。小論では動作主が同じか、異なるかに着目して解説していく。

(2) 经理叫她去机场。

(社長は彼女を空港に行かせた。)

(3) 你要我干什么?

(君は私に何をさせたいのか。)

(4) 我请他看电影。(私は彼を映画に誘った。)

(5) 爸爸领着我去了公园了。

(お父さんは僕を連れて公園に行った。)

(6) 我陪你去。(私がおともします。)

(7) 我帮你拿行李。(荷物をお持ちしましょう。)

(2)と(3)は兼語文である。(2)の“经理”は“叫”するだけであって、“去机场”するのではない。(2)は兼語文に属する、使役動詞“叫”を使った使役文である。使役文では、「～するように言う」と間接話法を用いて和訳するとしっくりいくことがある。(3)の担い手も2人いる。“你”が“干什么”するのではなく、“我”が“干什么”するのである。

(4)と(5)は図式的には一見兼語文のようである。しかし、(4)は“他”が、せいぜい“看电影”の動作主といえるだけで、主要な主語はやはり“我”である。(5)においては“爸爸领着我”があくまで中心的なものであり、“领着我”は付帯状況を表しているにすぎない。したがって、(4)と(5)は兼語文というより連動文とするのが妥当である。

(6)と(7)は動作主が同じなのか、異なるのか不明確である。(6)は“我”が“陪”+“去”であると考えれば連動文である。ところが、“你”が“去”の主要な動作主で、“我”は“陪”することに重点があると考えれば兼語文ということになる。(7)では、ホテルのボーイ“我”が客の“你”に発話したとして、客が荷物を多少なりとも持つのかどうかにより兼語文か連動文かが

決定される。客も荷物を持てば兼語文であり、ボーイがすべて運んでしまえば連動文である。

6. “有”を用いる連動文と兼語文

前の動詞（句）が“有”である文も、形式上は動詞（句）が連用されており、連動文の一種と見なされている。ただ、“有”という動詞は動作行為を表さないため、これまで解説してきた連動文とは状況が若干異なってくる。“有”はまた兼語文にも用いられる。

6-1. “有”を用いる連動文

- (1) 他们都没有房子住。
(彼らには住む家がない。)
- (2) 我们都有饭吃, 有衣服穿。
(我々には食べる物があり、着る物もある。)
- (3) 我有一件事要跟你商量。
(あなたに相談したい事がある。)

(4) 现在我没有时间玩儿。

(今私には遊ぶ時間がない。)

(1) の“房子”は“有”の目的語であるが、“住”の主語に成り得ないので、典型的な連動文とは言い難い。

6-2. “有”を用いる兼語文

(1) 我有个哥哥在北京工作。

(私には北京で仕事をしている兄がいる。)

(2) 教室里有人说话。

(教室で誰かが話をしている。)

(3) 那家商的东西太贵, 没有人买。

(あの店の品物は高すぎて、買う人がいない。)

中国語では、先に人や事柄の存在をあげ、その後それがどうしたのかという説明をするので、これらの文型では後ろから日本語に訳すのが定石である。

7. 連動文レベル別チャート

7-1. 初級編

「連動文」は初級レベルであっても、各段階でそのつど取り上げていくことが大事である。

一般の教科書を使用する場合、だいたい“有”と“在”の講義が済んだところに各種の「動詞述語文」を教えることになる。動詞述語文の最後の項目に簡単な連動文を教授したい。

3-1. “来”や“去”を伴う連動文

形式1：前の動詞（句）は手段・方式を、後の動詞（句）が移動先を表す。

(例) 她骑自行车来。

(彼女は自転車に乗って来る。)

形式2：前の動詞（句）は移動先を、後の動詞（句）が目的を表す。

(例) 我去图书馆借书。

(私は図書館に行って本を借りる。)

形式4：前の動詞“来”や“去”に「行く、来る」の意味はなく、後の動詞（句）の行為を積極的に行うことを表す。

(例) 我来介绍一下。

(私からちょっと紹介しましょう。)

形式1と形式2とでは“来”や“去”の位置が逆転する。

自己紹介の場面で必修

「喜欢を用いる文」や「二重目的語文」が登場したら、2. 連動文ではない文型(4)～(7)の例を教授する。

(例) 她三岁就学弹钢琴了。

(彼女は三歳からもうピアノを習った。)

ポーズの位置、目的語の構造など

介詞（前置詞）や「助動詞」を教えたら、3—2. 介詞（前置詞）を用いる連動文を教授し、動詞の連用と介詞（前置詞）構造の関連を理解させる。

形式1：前の動詞（句）は手段・道具・材料を、後の動詞（句）が行為を表す。

(例) 我们不用筷子吃饭。(私たちは箸でご飯を食べない。)

(例) 他拿毛笔写字。(彼は筆で字を書く。)

「副詞」や「助動詞」の位置

我给你买一个。→ “给” が介詞の用法

「動作の進行」や「状態の持続」、助詞「了」の講義が終われば3—3. “着”を用いる連動文を教授できる。

形式：前の動詞（句）に“着”を用い、後の動詞（句）の動作が行われる付帯状況を表す。

(例) 他站着吃面条。

(彼はうどんを立ち食いしている。)

(例) 我去商店买了件衣服。

(商店に行って洋服を買った。)

「動作の進行」は“在”

「状態の持続」は“着”

→連動文ではともに“着”

連動文での“了”の位置は二番目の動詞か文末へ。

教科書の終盤になると「兼語文」が登場するが、初級レベルでは“叫”、“让”、“使”を用いる「使役文」に限定して教授し、それが「連動文」とも見なすことができることを触れておく程度でよい。

(例) 让您久等了。(お待たせしました。)

“叫”、“让”、“使”を用いる使役文を中心に。

7—2. 中級編

1～2年間で基礎力が着いた学生や、しっかりとした基礎学力あり、中国で半年～1年間留学した経験のある学生には、「連動文」の学習を通して、語形変化のない中国語では、動詞+目的語という一見単純な構造の中に、多様な意味的關係が存在することを教授することは有益である。

3—1. “来”や“去”を伴う連動文

形式3：前の動詞（句）は目的を、後の動詞（句）が移動を表す。

(例) 我骑马去。→ “去”は轻声(私は馬に乗りに行く。)

形式5：“来”や“去”に「行く、来る」の意味はなく、前後の動詞（句）を結ぶ役割をはたす。

(例) 开宴会来欢迎他们。

(宴会を催して彼らを歓迎する。)

去买东西。と买东西去。の用法を習得しておくことが前提。

初級では“来”や“去”を「行く、来る」と訳してしまう。

3—2. 介詞（前置詞）を用いる連動文

形式2：前の動詞（句）は場所を、後の動詞（句）が行為を表す。

(例) 他躺在床上看书呢。

(彼は横になって本を読んでいる。)

请写在黑板上。のような結果補語の位置に来る“在”を習得しておくことが前提。

3—4. その他の連動文の形式2と6—1. “有”を用いる連動文とには中国語独特の共通点がある。また、“有”を用いる連動文の意味は多岐にわたることも理解させる必要がある。

(例) 我有事不能来。

(私は用があって来られない。)

(例) 你有话快说。(話があるのなら早く言ったら。)

原因・理由

仮定

連動文の一種に「兼語文」があり、「兼語文」の大枠の中の大部分が「使役文」である。初級で習った“叫”、“让”、“使”を用いるもの以外に、“派”、“求”、“称”、“选”などを用いるものもあり、これらも卒業までには教授しておく必要がある。

注

- (1) 平井和之 1992. 「中国語作文のコツ…連動文 (1)、(2)」『中国語』:69 頁。内山書店。
- (2) 小野秀樹 1992 「中国語入門講座…連動文」『中国語』:32 頁。内山書店。
- (3) 俞稔生 1994. 『中国語の虚詞について』:55 頁。長崎ウエスレヤン短期大学 紀要第 17 号。
- (4) 竹島毅 1988. 「連動型使役表現」『中国語の環』:12 頁。日本中国語検定協会。

参考文献

- (1) 李臨定 1993. 『中国語文法概論』:407 - 415 頁。光生館。
- (2) 山田真一 1992. 「中国語入門講座…連動文」『中国語』内山書店。
- (3) 今井敬子 1999. 「中国語入門…連動文 (2)」『中国語』内山書店。
- (4) 荒川清秀 1992. 『簡明初級中国語』光生館。
- (5) 劉月華 1996. 『現代中国語文法総覧』くろしお出版。
- (6) 相原茂 2002. 『中日辞典』講談社。
- (7) 『中日辞典』2003. 小学館。